自然の真の過誤

—デカルトの感覚論・3—

持田辰郎

序

我々はすでにデカルトの感覚論について二度論じ、それぞれその要点をいくつかのデカルトの命題にまとめ上げた。すなわち、まず、デカルトの感覚論全体の枠組みを以下の2命題に表現される《類似なき対応》と解した。

A. 我々の感覚とそれを引き起こす対象との間に類似はない

B. 我々の感覚とそれを引き起こす対象との間に対応がある

そして、《対応》部分 (B) を端的に表現するものとして、いわゆる「感覚の3段階」論⁽¹⁾をもとに以下の3命題を確認した。

B-1. 感覚をもたらすものは運動の伝播である

B-2. 与えられた運動を機会として感覚が発生する

B-3. 我々が感覚と解するもののうちには、知性による「判断」が含まれている

デカルトにとって厳密な意味における《感覚》とは第2段階 (B-2) のみであるが、それについては、

B-2-1 与えられた運動を機会として直接に発生するのは二次性質に関する感覚と内部感覚である

ということ、したがって、

B-3-2 個々の物体についての一次性質は二次性質によって再構成される

ことを明らかにした⁽²⁾。

さらに、B-1およびB-2の過程がともに神ないし自然 (nature) の定めとされ、したがって我々人間の本性 (nature) とされていること⁽³⁾、すなわち以下の各命題、

B-1-1 運動の伝播の過程は自然の制定による

B-1-1-1 感覚に関与する身体構造は我々の本性である

B-2-2 感覚の発生は自然の制定による

B-2-2-1 自然は脳内の運動と発生する感覚の対応関係を一意的に定めた

をもとに、感覚的観念も本有的である⁽⁴⁾とされる意味について考察した。また、感覚の目的について言うならば、

C 神は欺く者ではありえない

C-1 感覚もその類において完全である

という観点から、

B-2-3 感覚の目的は真理の把握にあるのではない

B-2-4 感覚の目的は人間にとっての利害を教えることにある

ことが明らかとなる。この目的からして、感覚は単に中立的なデータとして与えられているのではなく、信ずるよう我々の精神に働きかける力としてある。すなわち、

B-2-5 人間には感覚を信じ、それに従って行動する傾向性が本性としてある

のであって、この傾向性こそ「私の信じやす

さ」⁽⁵⁾の核心を構成する。その中には真の「自然の教え」も、ただ単にそのように《思われる》だけにすぎないものも混在しているであろう。真理の探究者の省察は、その力に抗しての両者の弁別過程としてあることとなる⁽⁶⁾。

しかし、真の自然の教えと単にそのように《思われる》だけで実際にはそうでなかったものとの間の弁別の前に、「自然の真の過誤 (verus error naturæ)」とされるものがある。「感覚は自然的に欺かれる (sensus naturaliter fallitur)」のであり、その点において「人間の本性はときに欺くものであらざるをえない」⁽⁷⁾とされる。ここで問題となっているのは、単に自然によって教えられたと《思われる》ことではない。自然の教えそのもの、その教えに伴う、それに従おうとする傾向性 (B-2-5) それ自体が我々を誤った行動へ導くのである。したがって、

B-2-5-1 真に自然によって駆り立てられることにさえ盲従してはならない

という教訓が得られることになる。しかし重要なことは、どのような場合がそれにあたり、どのような意味において過誤とされるのかを確認しておくことであろう。本稿の課題はそこにある。

I. 病気としての自然の真の過誤

二つの事例を比較してみよう。一方は水腫病患者、他方は「誰かがある食物の好ましい味に欺かれて、中に潜んでいる毒を摂取した場合」⁽⁸⁾である。両者には多くの共通点がある。彼らはいずれも「少し後に彼に害になる飲み物や食べ物欲する」よう「自然によって駆り立てられる (a natura impellimur)」⁽⁹⁾。彼らの感じる渇きや飢えの感覚は自然によって、あるいは彼の

本性によって与えられたものである。だが、自然によって与えられた感覚に従っているにもかかわらず、その結果が心身結合体としての人間にとって好ましからざる結果をもたらすこととなる。したがって、そこには何らかの過誤がある。この過誤を避けるためには、いずれの場合も、感覚のもつ、それに従って行動させようとする傾向性 (B-2-5) に抗する他はない。

しかし、その感覚が利害を教えるという目的 (B-2-4) に背くこととなり、その類における完全性 (C-1) とも、ひいては神の誠実性 (C) とも両立しないように思われ⁽¹⁰⁾、特別の弁論的考察が必要になってくるのは、すなわち「自然の真の過誤」は水腫病の場合だけである。

では、二つの事例においてどこが違うのだろうか。いずれも過誤であるにしても、その過誤の責がどこに帰されるべきか、過誤の原因のありかが違うのである。

水腫病の場合、その過誤のありかは、ともに自然によって制定された我々の本性である我々の身体構造 (B-1-1-1) と、そこからの感覚の発生 (B-2-2) までの段階に求められなければならない。すなわち、それは「自然学が私に教えるところ」⁽¹¹⁾に基づいて、松果腺の機能、運動の伝播にはじまる感覚の成立過程の考察によって解明されるのでなければならない⁽¹²⁾。それゆえに自然の、あるいは我々の本性の《真の》過誤なのである。

具体的には、飲料や食物を必要とする身体状態から脳内の運動の《ある》状態が生起する。そして渇きないし空腹の感覚が発生する。もちろん、多くの場合、飲料や食物を摂取するよう感覚によって、すなわち自然によって《駆り立てられる》ことは、心身結合体たる人間にとって有益である⁽¹³⁾。

この結果が不適切になるとしても、身体過程

とそれに応じた感覚の発生双方がともに不適切であるとは限らない。少なくともいずれか一方に不都合があればそのような事態は生じうる。

ではこの場合、どちらの過程にその責を負わせるべきであろうか。感覚の発生それ自体には《そのように定められている》としか言いようのないある種の《謎》が包含されている以上、その段階が別様にあり⁽¹⁴⁾、それが不都合の原因であると想定することも可能であろう。少なくとも機械論的には反証しがたい。しかしそのような想定は経験的な《謎》を本質的な《謎》に押しつけ、解明の努力を放棄することに他ならない。そうである以上、身体構造としての自然の問題 (B-1-1-1) とすべきであり、実際に水腫病者の状態はそれで充分説明しうるであろう。要するに水腫病は「病気」なのである⁽¹⁵⁾。それゆえ、

**B-1-1-2 身体構造として与えられた
我々の本性は、感覚の目的にそぐわぬ
ことがある**

ことの一例である。そのような事態はむしろ「まれではない (non raro)」⁽¹⁶⁾。

ただし、身体構造の問題であるとすれば、脳内の運動とそれを合図として発生する感覚との対応関係は一意的であり (B-2-2-1)、感覚は記号として安定 (B-2-2-2) しており、したがって類として完全である (C-1) ということに抵触することは何もない。狭義の感覚 (B-2) の問題ではないのである。

では、毒の含まれた食物を食べた人の場合はどうであろうか。彼も美味ないし飢えの感覚によって、すなわち「自然によって駆り立てられて」行動をおこしたこと、そしてその結果が身体の保全を主とする感覚の目的にそぐわぬものであったことは同じである。しかし、そのような結果を生じさせたもの、すなわち《通常では

なかったもの》は彼の身体でも、彼に発生した感覚でもなく、外的対象たるその食物である。彼に欠けていたのは対象に対する知であり、彼の本性を問題にするならば「全知ではない」⁽¹⁷⁾ ということではかない。

身体構造も身体外の対象も機械論的にはまったく同じであり、その意味ではこの場合も「自然の過誤」と言い得るかもしれないが、しかしその意味するところはまったく違うものとなる。身体は心身結合体たる人間にとって固有の自然ないし本性であり、自然の真の過誤、本性に基づく過誤という表現は、その責が身体に帰されるもののみ留保されるべきなのである。すなわち、感覚の目的に反する過誤のうち、身体構造が責を負うべきもののみが「自然の真の過誤」である。

II. 二つの「自然」、二つの判断

2.1 二つの自然

しかし、この「自然の真の過誤」において過誤とされる自然ないし本性は、勝義における自然ないし本性ではなく、したがってその過誤も真理の次元における誤謬ではない。水腫病者の渇きの感覚が「その自然に背いている」と言いうるのは、あくまで「人間の身体という機械」を感覚の目的 (B-2-4) にそって、すなわち「そこにおいて通常なされる運動を整えるものとして考察する (considerans... tanquam...)」からにすぎない⁽¹⁸⁾。つまり自然ないし本性という概念に「(心身) 複合体」⁽¹⁹⁾ としての目的を包含し、その観点からの過誤と言われているのであって、単なる物体としての身体にとってはそのような自然ないし本性の概念は「外的命名 (extrinseca)」⁽²⁰⁾ にすぎない。それは壊れた時計が、時計の自然ないし本性が「あらかじめ想

定された時計の用法」を含めて考察される場合にのみ「その自然（ないし本性）から逸れている」⁽²¹⁾ と言っているのと同じである。

しかし、壊れた時計も「あらゆる自然の規則を正確に守っている」⁽²²⁾。その点において時刻を正確に表示する時計と何ら変わるところはない。水腫病者の身体状態が渇きの感覚を発生させる過程もまったく同じである。身体から脳への運動の伝播は正確に機械論的法則に従っており、またその結果である脳の状態も一意的に渇きの感覚を発生させているにすぎない（B-2-2-1）。すなわち、「機械」としての身体は病人のものであれ誰のものであれ、そのあるがままの状態において「等しく自然的」⁽²³⁾ であり、その意味における自然概念のうちにこそ我々は「実際にもののうちに見いだされる何ものか」を知解し、「真理をもつ」⁽²⁴⁾ のである。

したがって、感覚の第1段階（B-1）に見いだされるこの「自然の真の過誤」は機械論的自然学にとって、すなわち真理の次元においては何ら虚偽ではない。その意味においては、第2段階と同様、この第1段階にも「いかなる虚偽もありえない」⁽²⁵⁾ のである。

2.2 判断の二つの仕方

しかも、この自然の真の過誤は「容易に矯正したり回避したり」⁽²⁶⁾ するものである。この矯正ないし回避は実践的な目的のためになされるであろう。すなわちこの過誤が感覚の本来の目的たる身体保全にそぐわぬのであるから、それに適合すべく正されるのでなければならない。しかし、目的は実践的であるとはいえ、その矯正は真理の把握に基づかなければならない。「すでに過誤のあらゆる原因を洞察した知性」⁽²⁷⁾ が必要なのである。具体的には身体状態の理解、自然学ないしその分枝たる医学⁽²⁸⁾ の

問題であろうが、感覚の構造の把握も必須である。

自然の真の過誤が感覚を引き起こす身体的過程に起因するとすれば、その結果としての感覚の発生（B-2）それ自体は必然的であり、身体状況の改善すなわち病気の治癒によるのでない限り回避することは不可能である。飢えや渇きは、水腫病者のものであれ健康な人のものであれ、「胃や食道等々の神経に」、すなわち身体状態に「依存しており」、自然概念の本来の意味において「自然的」である。そのうえ、そのような感覚を感じるのみならず、それをそれに従って行動する傾向性（B-5-2）をも伴っている。行動に誘う力はそれなりに強く、それゆえ「自然的欲求（appetitus naturalis）」と呼ばれるであろう⁽²⁹⁾。

しかし、言うまでもなく、欲求は行動を必然的に伴うのではない。自然によって与えられたものには、すでに習慣となり無意識的になされ、したがって感覚の一部とさえ思われるようになった《判断》（B-3）であれ、あるいは明確に意識された判断であれ、何らかの判断が後続する。行動するためには、その判断、その判断に従って行動しようとする意志、そしてその行動を可能にする諸条件が必要であろう。行動に責を負うべきなのはその判断ないしそれに従おうとする意志である。したがって、まずもってその《判断》を変えなければならない。

たとえば我々は通常「対象のうちに色を知得する」と言う⁽³⁰⁾。あるいは熱い物体のうちに「私のうちにある熱の観念にまったくよく似た何ものかがある」と考える⁽³¹⁾。渇きの場合なら「身体が飲料を必要としている」という判断であろう。これらの判断の仕方はいずれも感覚と対象との間の《類似》を前提としており、もしそれが感覚そのものの一部と解されている

なら「無思慮に判断するある習慣」⁽³²⁾ (B-3-1)に他ならない。この類似の想定は自然によって与えられたものではない。

必要なことは、自然に依拠する本来の感覚を、それに通常混入する類似の想定に基づく判断から識別し、自然的部分に限定された判断を定立することである。無自覚的な判断に対して、真理の把握に基づく意識的な判断を対置しなければならない。ここに「感覚的なものについて判断をなす二つの仕方」が成立し、我々は「その一方において誤謬を防ぎ、他方において誤謬に陥る」⁽³³⁾のである。

誤謬を防ぐ判断の仕方の一つは、判断を感覚それ自体に、すなわち「本来 (proprie), 私のうちにおいて感覚すると呼ばれるもの」に限定することであろう。すなわち、「私は見ていると、聞いていると、熱を感じていると思っている (videre videre, audire, calescere)」ことは「思惟することに他ならず」、「偽ではありえない」⁽³⁴⁾。渇きの場合なら「渇きの感覚がある」であろう。このような判断の仕方は、対象との類似性のみならず、対象の存在そのものをも保留しており、懐疑の過程にふさわしい。

しかし物的世界の存在が、すなわち感覚の対象の存在が明らかになった後ではもう一步踏み出すことができる。なぜなら、すでに見てきたように⁽³⁵⁾、感覚と対象との間に《類似》はないが (A)、《対応》はある (B) からである。先の無自覚な諸判断のうちの《類似》部分を《対応》に置き換えた命題ならば、誤謬に陥ることなく対象世界を解明する糸口となりうるであろう。すなわち、

B-3-1-1 類似の想定に基づいた判断を、対応に置き換えた判断に変換すべきである

ということであり、そのようにして定立された

判断は感覚の構造に対する知に基づいた意識的なものであって、対象の真理の把握にも、実践的誤謬の防止にも貢献するであろう。それはたとえば「対象のうちに、…我々のうちに色の感覚と呼ばれる、ある感覚を引き起こす何ものかを知得する」⁽³⁶⁾、あるいは火のうちには「我々の感覚に熱や苦痛をもたらす何ものかがある」⁽³⁷⁾と表現されることになる。渇きの場合なら、「身体の一部が飲料を必要としているときと同じ状態にある」となろう。要するに「感覚がある」と言うにとどまらず、対象ないし身体のうち当該の感覚を引き起こす、すなわち《対応》する「何ものかがある」ということを表現することとなる。

2.3 自然の真の過誤と質料的虚偽

もっとも、自然によって提示されたこの「何ものか」を精神が受け取ること自体は、判断というよりむしろ観念と言う方が適切かもしれない⁽³⁸⁾。少なくとも「認識する能力」としての知性の問題であり、「判断する能力」ないし「選択する能力」としての意志とは区別される⁽³⁹⁾。したがって、「自然的欲求」を感じること、それに従って行動しようとする意志とは「明らかに異なる」⁽⁴⁰⁾のである。そのような欲求があること、それが身体状態に何らかの対応があること、そこまでに「細心の注意をもって」判断を限定する限り、明晰判明であり⁽⁴¹⁾、誤謬に陥ることはない (A-2)⁽⁴²⁾。

すなわち、「自然の真の過誤」はそれ自体が過誤ではない。水腫病者の渇きの「自然的欲求」は、真理の把握として肯定され、実践としてそれに従って行動された場合にのみ過誤となる。それゆえそれは、それ自体過誤と言うより「過誤の素材 (materia...erroris)」、すなわち「質料的虚偽 (falsitas materialis)」と言うべきで

あろう⁽⁴³⁾。いかに自然的な欲求とはいえ、自己の身体状況に対する正確な知により、それに従わぬことが可能なのである。

むろん、そのような知が欠けることはあるだろう。その場合、知の対象が異なるとはいえ、それと知らずに毒の含まれた食物を食べた人の場合と同じである。健康な場合に渴きをいやすことは身体の保全に有用であり、また「生活の行動はしばしばいかなる遅滞も許さない」⁽⁴⁴⁾以上、無知が誤った行動を引き起こすとしてもやむを得ない。

また、知っていたとしても、その欲求は自然的であり、「意志に何らかの力を及ぼし、情念やそれに伴う身体の運動を引き起こす」がゆえに、「自然的欲求と意志との間の戦い」が発生するかもしれない。「我々のうちにあって我々の理性に対立するもの」はすべて身体に帰されるべきであり、本当は身体状態と精神の戦いであるとしても、「感覚と呼ばれる精神の劣った部分と理性的である高い部分との戦い」⁽⁴⁵⁾の様相を呈することになる。「精神の強さ、弱さ」⁽⁴⁶⁾が試されることとなり、「たえずその場その場の情念に引きずられる」⁽⁴⁷⁾人もいるであろう。それゆえ、「自然の真の過誤」は「人間の生活は個々の事柄に関してはしばしば過誤に束縛されていることを認め、我々の本性の弱さが認識されねばならない」⁽⁴⁸⁾ ことの一例となるかもしれない。

Ⅲ. 自然の真の過誤と一次性質の感覚

3.1 一次性質の感覚に「自然の真の過誤」があるか

水腫病者の渴きは内部感覚である。黄疸の場合⁽⁴⁹⁾なら、問題とされるのは対象の色、すなわち二次性質の感覚である。自然の真の過誤の

典型例は二次性質の感覚や内部感覚に関して与えられているわけである。では一次性質の感覚についてはどのように言うべきであろうか。外的対象の大きさや形等の感覚に関し自然の真の過誤はないのであろうか。

当然あるように思われるであろう。精神に対象の「位置、形、距離、大きさ」等々を知らしむるのは一つの感覚ではなく複数の感覚、とりわけ触覚と視覚である⁽⁵⁰⁾が、視覚の場合、盲目の人が存在することはもとより、そこに様々な障害がありうることは経験的に自明である。そのような障害の多くが眼球その他の身体構造の問題に由因することは言うまでもない。また、一次性質の感覚も当然ながら感覚の目的たる身体保全にとって重要である。たとえば対象物の大きさや身体からの距離の把握なくして、それを求めたり避けたりすることはできない。それゆえ、それらの感覚が歪むとするならば《感覚の目的に背く》こととなろう。いずれにせよ、「自然の真の過誤」という概念を病気や障害のそれと同一視するならば、視覚障害等がその概念に包摂されることは明らかのように思われる。

3.2 一次性質の感覚の精度

しかし、ことはそれほど単純ではない。そこには少なくとも二つの問題が輻輳する。まず第1に、《身体構造に基づく感覚の歪み》と言うならば、病気や障害のある人のみならず全人類共通のものとして、すなわちいわば人間の本性としてのものがあるからである。とりわけ対象の一次性質の把握の《精度》は健常者からしてきわめて限定されたものでしかなく、障害者との差異は本質的には《程度の差》でしかない。

視覚の場合、対象物の大きさや形の把握は眼底にある膜に描かれた「絵 (peinture)」⁽⁵¹⁾、それをもとに脳内に描かれた「絵」⁽⁵²⁾が前提とな

る。しかし、そもそもその「絵」自体に様々な「欠陥」⁽⁵³⁾がある。とりわけ運動を脳内に伝達する神経繊維には識別可能な最小単位があり⁽⁵⁴⁾、その精度は限定的なものでしかない。「四角い塔が丸く見える」主要因であろう⁽⁵⁵⁾。対象物の距離の把握に至ってはさらに複雑な要因が絡みあい⁽⁵⁶⁾、「精神が視覚の対象の距離を知るための手段はすべて不確か」⁽⁵⁷⁾なのである。

触覚でも対象物の大きさや形は把握しうるし、それは「すべての感覚の中で欺くことが最も少なく、最も確実であると考えられている」⁽⁵⁸⁾としても、ことその精度となると視覚以上のものではないだろう。それどころか対象をまったく間違えることすら容易にありうる。戦闘から戻った兵士が、甲冑の下にくい込む「留め金か革帯」が彼を圧迫しているのを負傷と勘違いするのは、触覚が正確にそれらの「像を彼の思惟に刻印」しないからである⁽⁵⁹⁾。

これらの制約は全人類に共通のものであり、差異があるとすればその程度であろう。しかも、たとえば視力が数値という連続量で示されるように、程度の差異は連続的である。もとより病気・怪我と健康・健常とを区切ることは経験的な問題に属し、どこかで線を引くしかないのであるが、過誤、より正確には過誤の素材を見定めるのは容易ではない。

3.3 自然の秩序の倒壊

さて、この問題、とりわけ感覚における人類共通の制約を理解するためには「自然の秩序を倒壊させる (*ordinem naturæ pervertere*)」慣わしとされるものについて理解しなければならない。それは、「本来はただ単に、精神がその一部である複合体にとって、いったい何か好都合あるいは不都合であるかを精神に指示するために自然によって与えられた」感覚の知得を、

「あたかも、我々の外に置かれた物体の本性はいったい何であるかを直接認知するための確実な規則であるかのように用いる」ことである。すなわち、感覚は心身複合体の保全という本来の目的 (B-2-4) のために存在し、「その限りでは (*eatenus*) 充分明晰かつ判明である」のだが、それを自然界の真理の把握という別の目的に《流用》しているのであって、その目的にとっては「きわめて不明瞭で不分明しか指示しない」⁽⁶⁰⁾のである。あるいは、二つの目的を区別せず、一方の明晰判明性を他方のそれと混同することと言ってもよいであろう。

さて、そのように言われる場合、自然の秩序を「倒壊させ」ているのは我々の《慣わし》であって、我々の自然ないし本性ではない。したがってそれらは《自然の》過誤ではないであろう。

「自然の秩序を倒壊させる」ことは、当然ながら二次性質の感覚や内部感覚についても容易に生じうる⁽⁶¹⁾。「色がある」、「痛みがある」等々の主張は、感覚によって与えられたものを対象についての描写として捉えているのであって、無条件に偽である。そのようなものは機械論的世界には存在しないからである。足があろうとなかろうと、「足に痛みがある」という命題は偽なのである⁽⁶²⁾。むしろ、二次性質の感覚や内部感覚も真理の次元と無縁ではないのであって、慎重に弁別するならば対象についての何らかの《存在》は示されうるであろう⁽⁶³⁾。そのためには、すでに見てきたように、感覚と対象の類似性は全面的に拒否し、《対応》する事態の存在に限定した把握にとどめなければならない。そのように《対応》を導きの糸とするならば何ものかが何らかの状態にあることは明らかにされうるのであって、内部感覚でさえ、対象と見なされた身体における何らかの異常性の発見に貢献するであろう。そのとき、痛みを

足に感ずるか手に感ずるかでは意味するところは明らかに異なる。しかし、二次性質の感覚や内部感覚について《流用》が許されるのは《存在》までである。すなわち、二次性質の感覚や内部感覚も真理の把握に貢献しうるとはいえ、感覚の目的に直接的であるのに応じて、その役割は間接的であらざるをえない⁽⁶⁴⁾。それゆえ、対象の真理の把握という異なる目的への《流用》はきわめて限定されたものしか許されず、とりわけ《類似》を包含した判断はすべて拒否されなければならない⁽⁶⁵⁾。

しかし、一次性質の感覚の場合、事情はいっそう複雑である。なぜなら二次性質や内部感覚と違って、一次性質は機械論的世界に存在するからである⁽⁶⁶⁾。また感覚の側から言うならば、それらは与えられた非類似の感覚 (B-2) から何らかの判断によって再構成される (B-3-2) のであって、それによって感覚に本質的な非類似性がいわば補正されるのである⁽⁶⁷⁾。したがって、一次性質の感覚は外的世界をある範囲内において描写していると主張する権利があることになり⁽⁶⁸⁾、対象の存在のみならず、その描写として解することが可能となってくる。再構成の結果として類似性が一定程度回復されるとするならば、問題はもはや類似性の全面拒否ではなく、その《程度》を見極めることであろう。

もっとも、身体保全を目的とした、その限りで世界を顕わにする感覚を、真理の把握という異なる目的のために流用していることに変わりはないのであって、その目指すところの差異に基づく制約や歪みが生じてくるとしても何ら不思議ではない。

先ほど提起された感覚の精度の問題は、この二つの目的の間の差異によって説明されるであろう。たとえば「何か小さい、ないし遠いもの」⁽⁶⁹⁾について考えるならば、身体保全にとっ

てはそれらのものの重要度は相対的に低く、それゆえ心身複合体の利害の教示という感覚本来の目的 (B-2-4) にとっては精度の低い情報で充分なのである。それゆえ人間が誰しも感受せざるをえない感覚の精度の不充分さは、感覚がその類において完全である (C-1) ことに背反しないし、真に自然によるとしても《過誤》とは言われえないであろう。それが我々を「欺く」⁽⁷⁰⁾とされるのは、外的世界の真理の把握として解しているからであり、その限りにおいて不十分であるにすぎないのである。

3.4 一次性質の感覚における二段階の判断

一次性質の感覚について「自然の真の過誤」を語りたくさせる第2の理由は、すでに見てきたように⁽⁷¹⁾、それらが我々に感覚として直接に与えられているのではないからである。我々は対象の大きさや形を、運動の伝播の過程 (B-1)、二次性質の感覚の発生 (B-2)、そこからの再構成 (B-3-2) という迂路を経て《感覚する》。最後の再構成の段階には判断の「習慣」や過去の判断の「想起」が、つまり「幼少の頃から親しんできた先入見」⁽⁷²⁾が関与するのであって、純粋に《自然的》ではないのである。

確かに「自然の真の過誤」と呼ばれるものも判断を伴っていた。すでに見てきたように、それはそれ自体が過誤ではなく、過誤の素材、質料的虚偽であった。すなわち、水腫病者が過つのは、乾きの感覚に基づいて「飲料を必要とする」と判断し、それに従って行動する場合であって、その過った判断や行動の誘因たる感覚が「自然の真の過誤」とされたのである。

しかし、ここでは二つの判断が区別されなければならない。我々がすでに命題化した表現によれば⁽⁷³⁾、次の二つである。

B-3-1 我々が感覚と解するもののうち

には、類似の想定による判断がある

**B-3-2 個々の物体についての一次性質
は二次性質によって再構成される**

B-3-1は対象と感覚の包括的な類似判断であって、あらゆる感覚に伴いうる。「自然の真の過誤」とされる感覚にこの類似判断が伴うならば過誤を生じる。それゆえ「自然の真の過誤」は過誤の素材であって、それを防ぐにはこの類似判断を拒絶するしかない⁽⁷⁴⁾。

一次性質の感覚にも当然この類似判断は伴いうるが、しかし、一次性質の感覚の場合、《それに先だって》B-3-2の過程、すなわち二次性質の感覚に基づく再構成の過程があり、それによってはじめて《一次性質の感覚》が成立する。そこには何らかの《判断》が包含されており、それゆえ《一次性質の感覚》とされるものそれ自体は純粋に《自然による》、《本性による》と言いうるものではないのである。

たとえば「まっすぐな棒が水中では屈折により曲がって顕れる」という「過誤」⁽⁷⁵⁾について考えてみよう。棒の各点の色や光が《そのような像を組み立てるように》感覚されていることは確かに自然的であろう。ここまでが厳密な意味における感覚、感覚の第2段階である。しかし、そのことは「棒が曲がって見える」ないし「曲がった棒を見る」こととまったく同じではない。我々はその「色の感覚から」、正確には「そのような色の広がり、限界、さらに脳の部分との位置関係から」、対象物体の「大きさ、形、距離を推論する」⁽⁷⁶⁾のである(B-3-2)。

ここで「推論する」と言われる過程が何であるのか、解明には慎重な考察を要するであろう。通常は無意識的であり、「私たちはこの作用を単純な感覚の知得から区別しない」⁽⁷⁷⁾。しかし、この習慣化された無意識的過程を意識的、学的に分析することは可能であり、もしそうするな

らば、かなりの程度に複雑なものとなるはずである⁽⁷⁸⁾。それによって、この場合ならば、光の屈折をもたらす物体が対象から身体までの途中に介在することが明らかとなる⁽⁷⁹⁾。

むしろ、そのようにして一次性質の感覚が再構成されたのち、さらに類似判断が伴いうる。すなわち「棒が曲がっている」である。ここで問われるべきは、水のような光を透過する媒体が、視覚によって捉えられないがゆえに考慮されていないという点であろう。視覚に限定されているとはいえ、それは「私の感覚を動かすものがまったく何も生じない空間はすべて空虚である」⁽⁸⁰⁾という判断と本質的には同じであり、「無思慮に判断するある習慣」ないし「先入見」であって⁽⁸¹⁾、先に見た「自然の秩序の倒壊」の一例に他ならない。

一次性質の感覚の場合、類似判断以前に、感覚と解されるものそれ自体のうちにすでにして何らかの「判断」が介在する⁽⁸²⁾。それゆえ、仮に過誤があるとしても《自然の》過誤ではないであろう⁽⁸³⁾。

註

- (1) 『省察』第6答弁(AT-7:436:26-439:15)。デカルトからの引用は、すべて“*Œuvres de Descartes*”, publiées par Ch. Adam et P. Tannery, nouvelle présentation, 11 vols., 1964-74, Parisより。以下“AT”と略記して、上記のように巻数、ページ数、行数を順に:で結んで表示する。
- (2) 以上、拙稿「類似なき対応——デカルトの感覚論・1——」(名古屋学院大学論集, 人文・自然科学篇, 第43巻・第2号, 2007, pp. 23-34)。以下「拙稿1」と略記する。
- (3) *natura*ないし*nature*, およびその形容詞・副詞について、本稿ではおのおのの箇所における日

- 本語の語感に応じて「自然」、「本性」、ときに「自然ないし本性」と訳しわけけるが、言うまでもなく異なるものではない。
- (4) 『揭示文書への覚書』(AT-8-2:357:24-25/359:3-4)。
- (5) 『省察』第1省察(AT-7:22:5/22:29)。
- (6) 以上、抽稿「自然あるいは本性としての感覚——デカルトの感覚論・2——」(名古屋学院大学論集, 人文・自然科学篇, 第44巻・第1号, 2007, pp. 1-11)。以下「抽稿2」と略記する。なお、ここでは抽稿1・2において論じられた命題をすべて再録しておらず、したがって命題記号には空白が生じている。
- (7) 『省察』第6省察。引用は順にAT-7:85:23-24/88:26-27/88:20-22。同省察には他に「私の本性がさらされている過誤」等(AT-7:88:9/90:14-16)の表現もある。
- (8) 同省察(AT-7:83:29-30)。この事例は「新たな困難」の一例とされるが、しかし「自然の真の誤謬」とはされない。
- (9) 同省察(AT-7:84:8-10)。引用された表現は水腫病についてのものである。
- (10) 同省察(AT-7:84:12-15)。
- (11) 同省察(AT-7:87:5)。
- (12) 同省察(AT-7:86:16-88:18)。
- (13) 同省察(AT-7:88:13-18)。この点が「自然の真の誤謬」に対する弁神論の根拠となる。同省察の他の箇所(AT-7:89:11-13)も参照のこと。
- (14) 脳内の運動から別様の感覚が発生する可能性については同省察(AT-7:88:7-11)で示唆されている。
- (15) 「自然の真の過誤」が病気と定義されているわけではないが、同省察には「病気の人(ii qui aegrotant/ homo aegrotus)」(AT-7:84:9/84:13)という表現が見いだされる。同省察が扱うのは水腫病(AT-7:84:9-15/89:2-7)と幻肢痛(AT-7:77:1-7/87:4-18/88:22-89:2)であるが、水腫病については他に『省察』第4答弁(AT-7:234:6-9)、幻肢痛ないし痛みの身体上の位置の問題については『哲学原理』第1部第67節(AT-8-1:32:26-33:7)、同68節(AT-8-1:33:16)、同第4部196節(AT-8-1:319:27-320:22)参照。黄疸については『精神指導の規則』第12規則(AT-10:423:9-11/423:23-27)、『屈折光学』第6講(AT-6:142:19-23)、憂鬱病については『精神指導の規則』第12規則(AT-10:423:11-13)参照。また『揭示文書への覚書』(AT-8-2:358:6-11)には遺伝性の病気の本有性についての記述がある。水腫病が「自然の真の過誤」の典型として扱われるのは、それが飲料を摂取するという行動を引き起こしやすいからである。
- (16) 『省察』第6省察(AT-7:84:8)。同省察の他の箇所には「ときとして(aliquando)」(AT-7:88:21)とある。
- (17) 同省察(AT-7:84:3-5)。
- (18) 同省察(AT-7:85:4-9)。
- (19) 同省察(AT-7:85:20)。
- (20) 同省察(AT-7:85:15/85:19)。心身複合体、正確には複合体の精神にとっては「純粋な命名ではなく自然の真の過誤」(AT-7:85:21-24)とされる。“Descartes, Œuvres philosophiques”, textes établis, présentés et annotés par F. Alquié, Tome II, 1967, pp. 498-499の註, および同省察の他の箇所(AT-7:88:20-22)参照。
- (21) 同省察(AT-7:85:2-5)。
- (22) 同省察(AT-7:84:16-17)。
- (23) 同省察(AT-7:84:25)。Gary Hatfield, ‘Descartes’ physiology and its relation to his psychology’, in “Cambridge Companion to Descartes”, ed. by Cottingham, p. 369, n. 59参照。
- (24) 同省察(AT-7:85:15-17)。
- (25) 『省察』第6答弁(AT-7:438:21-23)。
- (26) 『省察』第6省察(AT-7:89:10-11)。
- (27) 同省察(AT-7:89:16-17)。
- (28) 『哲学原理』仏訳序文(AT-9-2:14:23-28)参照。
- (29) 同第4部第190節(AT-8-1:316:21-22/317:30-31)。飢えや渇きを発生させる身体の状態に

- ついて詳しくは『人間論』(AT-11:163:10-164:12) 参照。
- (30) 『哲学原理』第1部第70節(AT-8-1:34:9-10)。
- (31) 『省察』第6省察(AT-7:82:6-7)。
- (32) 同省察(AT-7:82:2-3)。『哲学原理』第1部第66節(AT-8-1:32:22-23) および第70節(AT-8-1:34:30-35:4) 参照。
- (33) 同第1部第70節標題(AT-8-1:34)。
- (34) 『省察』第2省察(AT-7:29:14-18)。『哲学原理』第1部第9節(AT-8-1:7:22-8:2) および同第66節(AT-8-1:32:10-14) 参照。
- (35) 註(2)の拙稿1参照。
- (36) 『哲学原理』第1部第70節(AT-8-1:34:10-14)。
- (37) 『省察』第6省察(AT-7:83:10-12)。
- (38) 『人間論』には「飢えの一般的観念」(AT-11:163:18-19)、「渇きの観念」(AT-11:164:12) とある。『哲学原理』第1部第34節(AT-8-1:18:3-6)にあるように、判断には知性のみならず意志も必要だからである。『省察』第4省察には「知性のみによってはただ観念のみを知得し、それについて私は判断しうる」(AT-7:56:15-16) とある。それゆえ飢えや渇きを意識的に肯定している場合は「判断」と呼びうるであろう。『哲学原理』第1部第32節(AT-8-1:17:19-25)をも参照。
- (39) 『省察』第4省察(AT-7:53:30-31/56:12-15)。
- (40) 『哲学原理』第4部第190節(AT-8-1:317:30-318:4)。
- (41) 同第1部第66節(AT-8-1:32:10-14)、第68節(AT-8-1:33:8-12)。『省察』第6省察(AT-7:83:16-19)では、「複合体にとっていったい何が好都合あるいは不都合であるかを精神に表示する」限りにおいて、感覚の知得も明晰判明とされる。
- (42) 『哲学原理』第1部第70節(AT-8-1:34:16-21) および『省察』第4省察(AT-7:56:15-18)。また『哲学原理』第1部第31節(AT-8-1:17:12-15)をも参照。
- (43) 『省察』第4答弁(AT-7:234:6-9)の「質料的虚偽」の議論において、「過誤の素材」の例として水腫病者の渇きが語られている。質料的虚偽については『省察』第3省察(AT-7:43:21-44:8) 参照。なお、拙稿「デカルトにおける『質料的虚偽』と観念の精錬」(名古屋学院大学論集, 言語・文化篇第13巻第2号, 2002年)をも参照。
- (44) 『方法序説』第3部(AT-6:25:3-4)。『省察』第6省察(AT-7:90:12-13)をも参照。
- (45) 『情念論』第1部第47節。引用は順にAT-11:365:15-17/364:19-23/365:2-4/364:19-22。
- (46) 同第48節(AT-11:366:22/25)。なお、同第49節では「精神の力も真理の認識なしには充分ではない」(AT-11:367:25-26) ことが論じられる。
- (47) 同第48節(AT-11:367:11-12)。
- (48) 『省察』第6省察(AT-7:90:14-16)。これが『省察』本文最後の文である。
- (49) 黄疽については前註(15) 参照。
- (50) 『人間論』(AT-11:159:1-8)。デカルトはここで「何らかの仕方では他の感覚にも」共通であると言っている。聴覚と嗅覚からも対象の距離の把握は可能であろうが、きわめて補助的な手段と言えよう。口内の物体の大きさを捉えるのは味覚と言うより舌等の触覚と言うべきであり、いずれも無視しうると思われる。
- (51) 『屈折光学』第5講(AT-6:115:29-30/117:8/120:1/121:20/123:1/123:12-13/123:22/123:28/124:14/124:24) および同第6講(AT-6:136:1/137:4/140:30)。
- (52) 『屈折光学』第5講(AT-6:129:17) および同第6講(AT-6:130:3)。
- (53) 同第5講(AT-6:121:21/123:28)。
- (54) 同第6講(AT-6:146:2-26)。Desmond M. Clarke, “Descartes’s Theory of Mind”, Oxford, 2003, Ch. 2, p. 57-59 参照。
- (55) 『屈折光学』第6講(AT-6:147:1-2)。『省察』においては、感覚の知得に対する誇張以前の、いわば素朴な懐疑理由の典型として扱われてい

- る。第1省察(AT-7:18:19-20)および第6省察(AT-7:76:23-24/82:10-12)。なお、視覚の精度を制約する眼球内の諸問題については『屈折光学』第5講(AT-6:121:19-124:13)、遠距離にあるものへの視覚の精度については同第6講(AT-6:134:13-21)等参照。
- (56) 本稿では取り扱わず、次号の課題とするが、ここには遠近法や三角測量、すなわちデカルトの言う「自然の幾何学(Géométrie naturelle)」が関与する。遠近法については『屈折光学』第4講(AT-6:113:8-25)、同第5講(AT-6:123:31-124:4)、同第6講(AT-6:147:4-12)、『人間論』(AT-11:162:29-31)、三角測量については『屈折光学』第6講(AT-6:135:8-29)、『人間論』(AT-11:160:16-26)参照。「自然の幾何学」という語句は『屈折光学』第6講(AT-6:137:28)、『人間論』(AT-11:160:22)に見いだされる。
- (57) 『人間論』(AT-11:162:17-19)および『屈折光学』第6講(AT-6:144:4-6)。
- (58) 『宇宙論』第1章(AT-11:5:21-22)。
- (59) 同(AT-11:6-17)。
- (60) 『省察』第6省察(AT-7:83:14-23)。
- (61) 同省察には直前に(AT-7:83:2-14)具体例が挙げられているが、星の大きさや空虚の問題とともに、火の熱や苦痛についても論じられている。
- (62) 『哲学原理』第1部第67節(AT-8-1:32:27-33:7)。
- (63) 同第69節(AT-8-1:34:4-6)。
- (64) 同節(AT-8-1:34:6-8)および第2部第3節(AT-8-1:41:28-42:1)参照。
- (65) 前註(2)の拙稿1, とりわけその註(2)参照。
- (66) 『省察』第6省察(AT-7:80:7-10),『哲学原理』第2部第1節(AT-8-1:41:9-13)および同第4節(AT-8-1:42:5-8)参照。
- (67) 前註(2)の拙稿1, とりわけp.29参照。
- (68) 『哲学原理』第1部第69節(AT-8-1:34:6-8)および同第71節(AT-8-1:35:19-36:2)参照。
- (69) 『省察』第1省察(AT-7:18:19-20)。
- (70) 同。
- (71) 前註(2)の拙稿1, とりわけpp.27-29参照。
- (72) 『省察』第6答弁(AT-7:438:7-15/438:27-439:1)および『哲学原理』第1部第71節(AT-8-1:36:18-22)。
- (73) 前註(2)の拙稿1, とりわけp.28参照。
- (74) 実際に行動に移るにはさらなる諸条件が必要であろうが、それらが満たされないがゆえに実行されない場合も過誤であろう。
- (75) 『省察』第6反論(AT-7:418:19-18)。本稿の基調である「感覚の3段階論」を引き出した反論である。
- (76) 『省察』第6答弁(AT-7:437:25-30)。
- (77) 同(AT-7:438:13-15)。
- (78) 前註(56)参照。
- (79) レンズの介在による屈折については、『人間論』(AT-11:162:1-16),『屈折光学』第6講(AT-6:142:24-144:4)参照。
- (80) 引用は『省察』第6省察(AT-7:82:5-7)。空虚については同省察の他の箇所(AT-7:83:12-14),『精神指導の規則』第12規則(AT-10:424:21-25),『宇宙論』第4章(AT-11:17:22-18:5),『哲学原理』第1部第71節(AT-8-1:36:2-11)等参照。
- (81) 『省察』第6省察(AT-7:82:2-3),『哲学原理』第1部第71節(AT-8-1:36:18)。
- (82) それゆえその訂正は他の感覚によるのではなく、自然学の知に基づく別の判断によらなければならない。
- (83) 先に挙げた視覚障害等の場合は、本来の感覚である二次性質のその発生に関しては「自然の真の誤謬」と言えよう。